

# 『タンド伯爵夫人』 —結婚と死の物語—

野村 昌代

『タンド伯爵夫人 (*La Comtesse de Tende*)』は、『クレヴの奥方 (*La Princesse de Clève*)』(1678年)、『モンパンシエ公爵夫人 (*La Princesse de Montpensier*)』(1662年)とともにラファイエット夫人の作品とみなされている。17世紀初頭の大河小説の時代に続いて現れた、より簡潔な文体で現実的な世界を描く中篇小説—nouvelles—のジャンルに属し、他の二編に比べても更に短い。(『クレヴの奥方』の4分1弱) 全体的な作品の完成度だけからいっても、現在まで読み続けられている『クレヴの奥方』には及ばないが、『タンド伯爵夫人』が『クレヴの奥方』以前に、それも作品群中最も初期に書かれたことは、決定的な証拠を欠きながらも多くの研究者によって承知されている。これらの三つの作品は、結婚の物語であり、全て主人公の死(かその暗示)で終わる。各々の結婚が各々の死に結びつく展開は作品ごとに異なるので、三作品を分析することによって、そこに作者が創作活動を通じて長年に渡って追求した主要テーマとその発展の過程を見ることができる。そのような視点から、第一の作品とされる『タンド伯爵夫人』を、主人公の結婚と死を結ぶベクトルをたどりながら、始点から到着点までの展開の過程を検証するのが本論の試みである。<sup>1)</sup>

\*\*\*\*\*

ラファイエット夫人は、中篇小説『モンパンシエ公爵夫人』によって1662年に文壇に登場した。一方で『タンド伯爵夫人』はやっと1724年になって、夫人の作品として文壇誌 *Mercure de France* 誌上に掲載された。この物語は『クレヴの奥方』の舞台である時代と『モンパンシエ公爵夫人』のその間に位置している。登場人物の名を持つ人物は実際に存在したが、この小説の話のような一生を送ってはいない。名前だけのモデルである。<sup>2)</sup> この時期の小説の特

徴における最も顕著な変化は、Paul Bénichou によって「英雄の滅亡」“la démolition du héros”<sup>3)</sup> と呼ばれるように、前時代—17世紀前半—のように、理想的な人物が活躍する非現実的な世界ではなく、読者の日常に極近い現実的な世界を描くようになったということである。この物語においても、恋愛は英雄小説におけるように美德とはもはやみなされず「恋愛は意志が全く通用しない弱さと宿命である」。<sup>4)</sup>これが17世紀後半に生まれた人間の魂に対するそれまでとは違うビジョンであり、ラファイエット夫人の作品群にも大きな影響を与えている。

## I. 法と罪

主人公タンド伯爵夫人は当時の習慣どおり理性による結婚—愛情を考慮しない利益のための結婚—をした後、当初は夫を熱愛したが、やがて他の男性を愛し、生き延びることのない子を早産した後、表向きにはそれが原因でこの世を去る。実は、彼女は夫を裏切って自分の親友の夫との不義の子を産みかけていたのだ。その前に真実が夫に知られ、愛人も戦死をし、恥を凌ぐ気力をもたず、苦悩で力尽きた彼女は自分の死を「歓喜」“joie”をもって迎える。夫も妻の死に悲しみではなく、むしろ哀れみ、さらに「歓喜」を最も強く感じるのである。なぜこのような最後を彼女は迎えるのであろうか。そして作者はなぜこのような結末を描いたのか。そしてまず、第一に、物語の始まりである結婚はどのような条件のもとにおこなわれたのであろうか。

### 1) 理性的結婚

#### 結婚生活における義務

結婚をした者には宗教、社会、慣習的義務がある。まずカトリックの教えにおいては、神の法に従って「結婚の絆は夫婦の貞節、生活共同体、身体的そして精神的扶助という相互的義務をもたらすものである」。<sup>5)</sup>身体的側面は、従って、精神的側面と同様に重要であり、夫婦は生活を共にしなければならない。しかしながら、タンド伯爵はとても若い妻と「普通夫が妻と生活を分かちよう」に暮らさなくなっている。そして、「他の女性」に恋をして、恐らく関係

を結んでいるので、伯爵夫人は嫉妬をしている。夫が結婚の法を犯す一方で、妻がその激しい嫉妬によって、かえって夫を遠ざかせているのである。それでも夫は義務を果たさなくなっていることを責められることはない。なぜなら、「社会の法律と道徳の制約は男性に対してと女性に対しては異なる」からである。<sup>6)</sup>つまり実際には、結婚と夫婦生活は宗教上の教えだけではなく、結婚を社会契約とするローマ法の伝統にも従って営まれるのである。そのうえ、17世紀においては全ての宮廷人は、暗黙の了解のもとに殆ど第一の法律ともみなされていたビアンセアンス“*bienséance*”（当時の規範となる礼節）という非常に拘束的な社会の慣習に従っていた。その状況では妻は夫に対して明らかに劣等の立場にあったのである。

### 結婚のビアンセアンス

テキストにある二つの例を通して、結婚が一般にどのように営まれていたかを知ることができる。第一に、タンド伯爵とストロッチ嬢の結婚は。双方の出自と財産のバランスがよいのでビアンセアンスにかなっている。愛は、François Lebrun が言うように、最も重要なことではなく、「全ての社会階層において、結婚は、広義にはまず利益の問題であり、愛情の問題ははるかに二次的となる」。<sup>7)</sup>

このような社会では、従って、裕福で家柄の高い寡婦ヌシャテル夫人と、旧家の出であるというだけで、地位も財産もないナヴァル公の結婚は当然常識に反する。そのため、ヌシャテル未亡人は「世間の非難を被り、自分の高い身分を犠牲にして、騎士と結婚した」(CT421) のである。反対にナヴァル公は「一介の財産のない貴族の末子が得られる最も大きなそして喜ばしい幸運を手に入れる」ことになった。この対照的なシチュエーションが一度ならず物語のなかで述べられること自体が、登場人物の運命と行動の異常さを強調している。あってはならないことだったのだが、ヌシャテル未亡人はこの結婚を彼女の恋情の激しさのために決意したのである。それでも、彼女はしばらく決心するのに時間をかけた後、結婚式が密かに行われた後にしか、世間に知らせないことにした。一方で、夫となるナヴァル公は、本当の恋人であるタンド夫人以外には誰に対してもやましさを感じていない。その妻は世間に対する恥の意識に耐

えながら、さらには、夫に愛されないという悲しみと嫉妬の不幸に我が身を追い込む。

## 2) 恋愛による不義

### 男性の自由

タンド伯爵とストロッチ嬢は、両家の利益に従って取り決められた、すなわちビアンセアンスにかなった結婚をした。しかし夫が結婚後すぐに、若すぎる妻に満足せず他の女性に恋をして妻をないがしろにすることは、妻の立場からは責めることができない。「イタリアの血を引く」タンド夫人は、結婚したとたん夫に激しく恋をする。それこそが問題である。彼女の激しい嫉妬は夫を遠ざける。作者は夫に非があるとは示唆せず、彼らがもはや生活をともにしないのは彼女の嫉妬が原因であるとする。妻の嫉妬は夫の不貞を促進するからである。こうなるとは、クレーヴ夫人の母親が娘に言い聞かせるように、「妻の幸福は一重に[……]夫を愛し、夫に愛されることにある」<sup>8)</sup> ことにはならない。ナヴァル夫人も夫の心が他の女性にあることに気づいても、夫を責めることはできず、ただ密かに嫉妬に苦しむのである。

### 女性の不自由

一方で、妻の不貞は世間から夫婦の両方にとって恥とみなされる。タンド夫人はナヴァル公と相思相愛であることを確信すると、「情事のもたらす恥と全ての不幸に気づき、自分が身をさらしている危機をかいま見たので、それを避けることを決心した」。この不幸とは、彼女にとって最も重要なものを失うことを意味する。それは、夫の敬意と自分のよい「評判」「réputation」である。それではこの「評判」とは何であろうか。

貞節ではない妻というのは、不貞を働く夫とは逆に、間違いなく社会の批判の対象になる。ナヴァル公に愛人がいることを知った時、タンド伯爵は「その婦人は、聡明ではなく、勇気もなく、思いやりももちあわせない人に違いありません」(CT 426) と言う。Micheline Cuénin は『タンド伯爵夫人』に関する論文“La terreur sans la pitié”のなかで、「男性にとっての名誉が、武器を手にして自分の価値を証明することにあるのなら、女性の名誉はいかに警戒心が強い

かということによって証明された。それは教育と‘よいお手本’の影響のもとに第二の本性となった。評判というのは、この真節の高い評価をいうものであり、道徳的、社会的財産、全員一致での高い評価を受ける‘宝’を形成する。だから、それは持参金の代わりにもなる！」と述べる。<sup>9)</sup>“貞節 (chaste)”という意味における“徳 (vertu)”こそが女性の荣誉、すなわち最も重要な長所であった。

タンド夫人は、平穩に生きるために不可欠であるこの貞節の重要性を自覚していた。だからこそ、ナヴァル公が結婚式の当日、伯爵の留守中に屋敷に忍び込み自分の前に現れたのを見て「私の対面を考えて下さっているのですか。」と叫ぶ。<sup>10)</sup>しかしながら、どんなに我が身をさらす危険について反省し、恋人と自分の潔癖さを過信して、心と行いを正して良妻という世間への対面を保とうとしたところで、「時間と重なる機会が、彼女の貞節と相手に対する敬意」に打ち勝って、ほどなく夫人は妊娠していることに気づいた。」(CT428) この事態は彼女にとって、夫婦生活だけでなく、社会的な意味でも致命的な恥を宣告する。既婚夫人に対しては、不貞は公私ともに死をもたらさすのである。ところで、夫たちはといえば婚外交渉を躊躇することもない。彼らの不貞そのものは問題にはならないし、自分の妻以外の既婚夫人を誘惑することに熱心でさえある。夫たちのこのような振る舞いに関する妻たちへの戒めとして当時の旧神父 Abbé de Pure は「(妻の) 勇気と徳をもって、治る見込みのない病に対するように振舞うべきなのだ。[...] 我慢する強さも、心の痛みを隠す知性も、耐え抜くだけの決意も、苦しみを拒まぬ善良さも、そして相手を許す愛徳をも十分に持ち合わせる」べきだと説く。<sup>11)</sup>つまり、一方的に耐え忍ぶのは妻たちである。それでは夫たちにとって、自分の妻の不貞が引き起こす問題とは何か。荣誉の喪失である。つまり、個人の名誉と特に社会への対面としての名誉である。妻が他の男の子供を宿したという知らせは、彼を「絶望」“désespoir” させるほどの「不幸」“malheur” である。それではこの絶望と不幸は何を意味するのか。そして、当事者の妻たちにはどういう結果が訪れるのか。Micheline Cuénin によると、妻の不貞の罪に対して殺人という復讐が実際にふつうに行われていた時代では、不貞による妊娠の結果は恐ろしいだけでなく命を奪うものでもあった。

では、なぜ妻の側の不貞はそれほど重大事なのだろうか。宗教的な意味での夫婦の連帯の重要性のために、その神の掟にそむいたせいで罪びとに刑を宣告するのか。恐らくそうではない。結婚による利益を優先して結婚をきめる社会では、結婚の精神的側面を第一に優先することはない。従って、この問題に答えをだすには、夫人公の不貞がもたらす結果とは何か、つまりそれが夫婦の各人にとって、個人としてとともに社会的存在として、なにを意味するかを知らねばならない。

## II. 社会的恥

### 1) タンド伯爵 — 男性の恥 —

タンド伯爵は、当時の宮廷人の典型的なタイプに属していると言えるだろう。物語の語り手は、「裕福で、姿の美しい、宮廷で最も華やか」な人だと形容する。そのような人は「名誉」「gloire」だけでなく「恥」「honte」を何よりも重要視しているはずである。この作品においては、伯爵が恥を覚えるシチュエーションが二度ある。一度目は、彼が妻の不貞という考え（真実）に初めて思いあたった時である。確信はないが、ナヴァル公の死の話に対する妻の激しい悲嘆ぶりを見て、それまで漠然ともっていた不信感が、一挙に筋の通った推測になった。しかし、夫にはその真実を承知する心構えがないのは彼の「自己愛」「amour-propre」がそれを認めることを潔しとしないからだ。<sup>12)</sup> 妻に裏切られ、それをまた知らずにいたと想像して、笑いものにされ、辱めをうけたという怒りを覚え、「絶望は極みに達し、心に浮かぶことは全て激しいものであった」。(CT 430) しかし聡明な夫は、最初の激情を抑え、また妻の不実を信じたくないという弱気から、彼女に対しては何もしない。その後彼が自分の恥を確信するのは、妻自身の告白の手紙が、伯爵の恥は現実であることを告げたからである。それも予想したよりもなお悪い事態である。妻の妊娠は彼の恥を決定的にする。その時の伯爵の有様は、正気の人とは思えないものであった。<sup>13)</sup> 妻を常々よく評価していた夫ではあるが、それだけに相手に対する怒りは大きい。殺してやりたいほどであり、初めはそれしか考えない。しかし、ナ

ヴァル公とその従者ラランド（妻とその愛人の仲介役）の死がその怒りを少し鎮める。さらに、妻がこの真実を知るのは夫だけであると知らせ、彼自身がだまされたことから、伯爵はこの恥が世間の誰にも知られていないことを確信して、少し気が落ち着く。とはいえ、いかに、そしてどれほどだまされていたかと思うと、復讐を願うばかりである。ただ、彼が妻を殺し、彼女の妊娠が世間の知れるところになったら、人々はただちに真実を悟るであろう。ここで、彼は恥を雪ぐ復讐を願う情念よりも、名誉を守ろうとする情念に従う。名誉心は復讐心に勝り、社会的名誉は、個人的な名誉を凌ぐ。妻への返事の手紙に、彼女の命は彼女に託すといつて、妻を殺害するようという挑発には乗らない。<sup>14</sup> 妻への返事の手紙は彼の心境を「私の恥がみんなに知れ渡らないようにという気持ちが、私に復讐を思いとどめさせます」と語る。<sup>15</sup> 世間に知られるということは、他の人々の笑いものになることを意味する。De La Rochefoucauld が言うように、それこそが不名誉なことである。<sup>16</sup>

以上のように、当時の、特に男性にとっての、名誉と恥の関係が何であったかということはこの作品を通して知ることができる。名誉は対面であり、恥はそれを失うことである。裏切られたと知ることを知って怒りを覚えるが、それは彼の心の真実の問題であって、世間に不名誉が知られないようにするのは、知らなければその不名誉はもはや公には真実ではないからである。だから不名誉な真実は隠さなければならない。そして伯爵は真実から目をそむけることを躊躇しない。今度は彼が真実を他人と自分自身の目から隠そうとする。そして今までどおり、誉れ高い姿を社会に示して行けば良いのである。このとおり、伯爵にとって恥というのは、彼自身が他人の笑いものになる、そして、そのために劣等の立場に置かれたと感じるときのみ起こる問題である。

## 2) タンド伯爵夫人 —女性の徳—

タンド伯爵に比べて、伯爵夫人はその恋人との関係の当初から、より様々なシチュエーションで恥を感じる。

### 後悔 —自責の念—

まず初めに、彼女が恋人と相思相愛であることを知った時に、「彼女は親友

が全てを犠牲にしてでも結婚しようとしていた男の心を奪うことを後悔した。犠牲になるのは親友の資産と地位と対面である。「この裏切りには彼女自身が嫌悪すべき恐れを感じた。そして情事の引き起こす恥と不幸が心に浮かんだ。」(CT 421) 彼女がヌシャテル未亡人に対して感じる後悔は、相互の友情を裏切ることが原因である。さらに、不倫を恥る思いがこの後悔に続いておこる。その上、結婚によってナヴァル公が得る財産に関して、ヌシャテル未亡人と彼に対する態度を誤ったという思いが彼女に罪悪感を抱かせる。ヌシャテル未亡人はついにナヴァル公との結婚を決意するが、いまだに婚約者の心の生ぬるさを不満に思っている。彼女は伯爵夫人にそのことを嘆き、伯爵夫人を動揺させる。友情を裏切り、恋人の立身を妨げる恋情は後悔を生む。そして、不倫は貞女の恥である。ところが、嫌悪と罪悪感を覚えながらも、結婚が決まると、今度は嫉妬が頭をもたげ、裏切りの恥の意識はどんどん薄くなり、かつては心から望んでいたはずのこの結婚を恐れ始める。<sup>17)</sup> その先の運命を想像すると不貞の恥は恐ろしい。しかしそれと恋人を決定的に失う恐れは別物である。結婚の決定は彼女に「死ぬほどの苦しみを抱かせた」<sup>18)</sup>

この先物語の終わりまで、主人公は絶え間ない「恐れ」“*horreur*”に苦しみ続ける。そして彼女が心の静寂を取り戻すのは死の床である。作者はその自滅の成り行きを情け容赦なく描く。

## 二つの情念のダイナミズム —愛と恥—

一方でナヴァル公は、タンド夫人への愛情を彼女に対してさらに大胆に証明しようとする。いずれ身に降りかかるであろう不幸を恐れて、彼の行動を「理性に反する」“*déraisonnable*”といさめはするが、夫人は自分の恋情に歯止めをかけることができない。<sup>19)</sup> ついには、自分の恋の激しさに全面降伏してしまう。<sup>20)</sup> そのころにはもはや親友を裏切ることへの良心の咎め、つまり恥の意識はどこかに忘れられてしまっている。公の妻として愛されることもできず、夫のように会うこともできない「悲しみ」“*chagrin*”が、彼女を盲目にする。恥の恐れではなく、恋の激しさが彼女に一時も心の静けさを与えなくなった。<sup>21)</sup> それは人間が自分の宿命を恐れるあまりに、パスカルの概念の気晴らし—*divertissement*—によってそれから目をそむけようとするのと同じである。



つについては、夫人の部屋でナヴァル公と一緒にいるところを夫にみつかるが、前者の機転で難を逃れる。真実の見えない夫がナヴァル公の秘密の愛人は立派な女性とは思えないというのを聞いて、タンド夫人は自分の行いが世間から、また夫から、どのように批判されるかを思い知らされる。この機会に夫人は、新ためて将来の不幸を予感し、恥を身にしみて思い描くのであるが、結局は恋を諦めきれない。<sup>22)</sup>この時点では、恋情は恥の恐れよりも強いのである。恋人たちは事態を明晰に把握していても、その恋情は危険を警鐘する出来事があるたびに激しさをますばかりである。Henri Couletはこの二人は相互の愛を「絶対のように」「comme un absolu」熱烈に追い求めるようになると述べる。<sup>23)</sup>しかしこの絶対の愛も、やがては幻影のようにあっさりと消えてしまうのだ。

### 社会的恥か自死か

戦争の始まりとともに、主人公は自分の行動の結果を耐え忍ばなければならなくなる。恋人が出陣し戦死することを恐れて彼女は不安な日を過ごす。結局、田舎の別荘に移ることにして、あらかじめ恋人と別れるのだが、時すでに遅し。田舎で妊娠していることに気づく。なぜか突然に夫の権利を取り戻そうとした伯爵にはずっと前から関係を拒んでいたのだから、ナヴァル公の子であることは間違いない。初めは自分の貞節を過信していて、またナヴァル公が彼女に対して大変慎重深くしているので油断をしていたが、男女の関係の成り行きには勝てなかったのだ。<sup>24)</sup>彼女が恐れはしていたが、目をそむけ続けていた不幸と恥が現実になろうとしていた。彼女は彼への愛への純潔さを捨てて、夫を挑発してでも真実をごまかそうと試みる。現実には絶対の愛はありえない。以前の恥に対する恐怖は、想像の中にしかなかったが、今、恥が現実化しつつある時、恐怖は想像を遥かに超えたものになる。さらに悪いことには、ナヴァル公との連絡係であった従者が死に、ナヴァル公本人も戦死をしたと知る。この最後の一撃に夫人は耐えられない。既に「絶え間ない不安」「continuelles craintes」と「死ぬほどの恐れ」「mortelles horreurs」に疲れ果てていた彼女は意識も理性も失う。すると恥への懸念はこの極限の悲嘆のせいで弱まり、心が「少し慰められるように」「une espèce de consolation」さえ感じた。「もう心の安息も、自分の評判も、また命のことさえも、何一つ気にかけることはしなくなった。」<sup>25)</sup>

「死のみが望まれて、苦しみのために死ねればよい、そうでなければ自分で命を絶とうと心を決めていた。」<sup>26)</sup>すでに、彼女は激しい苦悩のせいで、魂を病んでいる。将来への不安と苦悶一恥一、そして生きる望みの喪失一愛人の死一は死によってのみ解決される。しかし「自然とキリスト教の掟」“la nature et le christianisme”が、自殺を阻む。この作者の指摘は、この小説の中でも、そのリアリストな視点を最もよく現している。死を望ませる恥と絶望よりも強力な要因とは、自然の自己保存の本性（理性ではなく）、と宗教の戒律（天国への希望を絶たれる）であった。当時は、自殺は宗教上の、そして社会的な義務放棄行為とみなされていたが、それでも Micheline Cuénin と Georges Minois によると、宗教的タブーとして教区の記録として残されてはいなくても、自殺は行われていたらしい。<sup>27)</sup>しかし、自殺は公には認められていなかったのも、ラファイエット夫人はここで自殺の可能性を示唆するにとどまらざるをえなかったのである。しかし、この禁止が、主人公の最後を自殺よりも恐らくさらに悲惨なものにするのである。

夫が帰宅して、ナヴァル公の死とナヴァル夫人の悲しみについて話さずや否や、タンド夫人は嗚咽を抑えることができない。夫に隠しおせようとするわずかな望みもこれでたたれる。妻の異常なまでの嘆きに夫は真実を悟り、夫人もそれに気づく。魂の悲嘆は自己愛一恥一の拒否一よりも強い。罰の重さを免れようとしたが、不可能だった。夫は真実をかいま見た気がして激情するが、何も気づかなかったようにその場を去る。それを見た主人公は、この世で生き延びることを恐れているが、反対に「来世の望み」だけは確保しようと試みる。<sup>28)</sup>キリスト教の掟にそむいて自殺をすれば地獄行きである。自殺以外の死ぬ方法として、彼女は一計を案ずる。タンド伯爵に命を捧げるのである。夫の手にかかって死ねば、天国に行ける。そのために、彼女は夫に告白の手紙を書く。妊娠を告げ、一度は自殺を考えたが、犯した罪の償いとしてその命を神と夫に捧げると訴える。そして自分の恥は夫の恥だから、（自殺をすれば世間が真実をさとるので）夫自身のために社会に対して真実を隠蔽しろという。つまり彼の不名誉を世間の目にさらさぬためにも、殺してくれというのである。ところで、本来告白というものは真実を告げるべきものである。本当は地獄行きを恐れていることをごまかす主人公の、神をも欺こうとするこの卑劣な態度は、

クレーヴの奥方の夫への告白の手紙の誠実さとは全く相反するものであるが、人間の本性の真実を残酷なまでに暴いている。タンド伯爵夫人には、自分の過ちの責任をとる「魂の強さ」「*vertu*」も、潔さもない。ここでも恥はその正統さを失っている。神を欺こうとすることに彼女は罪悪感を感じない。<sup>29)</sup> 彼女は生き恥をかくよりも、死ぬことを選ぶ。ただし、来世の確かな保証を手にしてという条件で。しかし、このような意志の強さは、神への愛に基づくものではないので、「偽の徳」「*fausse vertu*」とみなされ、魂の救済には値しないのであるが。<sup>29)</sup> 結局、夫はその理性と明晰さによって、妻を殺してやりたいとは思っても、それではかえって世間に真実を悟らせてしまうと考え、当面の身の振り方を彼女自身にまかせると返事する。夫人はこの返事を死の言い渡しと思って、「歓喜」「*joie*」をもって受け取った。しかし、妊娠が人目につくようになると、今こそ彼女は、世間に恥をさらすという辛さを現実には味わわねばならなくなる。それはそれまでの苦悩をさらに超えたものであった。「彼女は、夫が妻の妊娠を世間に知らせてもよいと考えているのが分かったとき、恥というのが人間の感情の中で最も激しいものだ」と悟った。」(CT 432) 愛人の死による苦悩を生きた後主人公は、今度は絶望よりも恐ろしい感情があることを知る。今では、死こそが愛の絶望と恥の苦しみから解放される唯一の手段である。宮廷人の *raison d'être* が社会的な栄誉と評判にあった時代には、不貞を働いた妻は社会的な存在としてはもはやありえなかった。社会的な死とは、耐え難い恥であり、肉体の死は魂に休息を与える。

タンド夫人の最初の恥は、ヌシャテル未亡人の友情を、相手に悟られぬまま裏切った時に意識された。しかしナヴァル公との相思相愛の仲を終わらせるにはおよばず、やがて忘れられてしまう。その次は、不貞の恋愛関係を続ければまぬかれないであろう恥と不幸が想像される。しかし彼女の恋情は、大胆なナヴァル公の行動に刺激されて、どんどん激しくなる。それと同時にナヴァル公の行動が彼女を陥れる深遠をかいま見させられても、恋情に囚われて逃げられない。Henri Coulet はそこに『タンド伯爵夫人』の新しさとして、「一方の情念ともう一方の間にある関係、つまり焼尽する情念に逆らって制止する情念に求められる最後の手段が見えてくる」と述べる。<sup>30)</sup> しかし結局は自らの死のみが、不名誉な人生の恐怖から彼女を救えるのだ。社会的死は肉体の死よりも主人公

を戦慄させる。恥に伴う社会的な死という危険は物語の初頭から主人公の上に影を投げかけはじめる。この影は、次第に濃くなっていくが、タンド夫人はその意識の明晰さを失なっていないまま、恋情に引きずられて解き放たれることがない。そして自らの死を望むようになる。

それではこの恥とはなんなのであろうか。この問いに対して、Micheline Cuénin は「それは不運なタンド伯爵夫人の貞節の声価の失墜に続き、さらに彼女を自殺の誘惑に陥れる一種の準死という恐ろしい自覚である」と応える。<sup>31)</sup> しかしながら、確かにこの恥の自覚が主人公を死の誘惑に誘い込むとしても、もし彼女を支え、保護するようなよい環境、母親とか夫とか、に恵まれていたのなら、或いは本当の貞節（女性の徳）といえる魂の強さがあったなら、彼女が最悪の結果を免れることもありえたであろう。しかし彼女は、同時代の他の殆どの女性と同じように、真の貞女ではなかったのである。では、本当にこの恥の意識のみが彼女を死に追いやったのであろうか。

### 真の、それとも偽の貞節？

本論のI章でも述べたように、女性にとっての徳とは、己の貞節をいかに誘惑の危険から守るかという、困難な自己防衛の能力によって評価される。それは男性にとって戦場の武勇を困難度で測るのと同じ理屈である。そして女性に貞節であることを困難にさせる相手は、まさしく男性なのである。しかし、男性は不実であることを責められはしない。この作品では、彼らの不名誉は、妻の不名誉によってしか生じない。伯爵もナヴァル公も宗教的贖罪も恐れず、自分の不貞を恥じることもない。伯爵の懸念は妻の不実で世間の評価が地におちるということのみである。それなら、謙虚さも持ち合わせず、自己愛にのみ従ってしか反省もしない男性たちは単なるエゴイストである。<sup>32)</sup> 実際、彼らを行動させるのは、徳心ではなく様々な情念のみである。その情念のなかで、人間を破滅させる第一のものが恋情と恥である。前者は社会的、宗教的違反を生じさせ、後者の原因となる。<sup>33)</sup> 恥の意識が愛の誘惑に抵抗することによって恋情がさらに強まる。だからこそ主人公は恋情の強さにまけて恥に目をつぶるのである。この恋愛関係はナヴァル公の死で終わり、後には妊娠のせいであらうが知られるという恥に対する恐怖のみが残る。もともとタンド夫人の結婚生活は

このような宿命のもとに始まった。若くして政略結婚し、夫に愛されず、異国での結婚生活で彼女は愛情を、激しく求愛してくる独身のナヴァル公に期待するしかない。その後に友情を裏切る後悔と恥の恐怖は彼女の恋情に水をさすが、嫉妬がよけいに油を注ぐ。障害があればあるほど情念は強まる。それは恋人たちの両方にとって同様である。男性の死によって恋物語が終われば、女性が後始末を自分で引き受けなければならない。注目すべきは、恥が最も恐れられるのは彼女が妊娠を知った後ということである。恥を回避する可能性がなくなったからだ。

以上から、タンド伯爵夫人を死に追いやったのは、社会の制約、恋情、魂の弱さ―不徳―、そして恥の恐怖であると考え。ラファイエット夫人は、当時の社会とそのモラルに従い、フィクションではあるが大変蓋然性の高い、ある不貞節な妻の人生を描いて、そのペシミストな世界観を示したのである。

本論の最終部では、主人公の死の場面を読み込むことによって、いかに彼女が自身と我が子の死をうけとめ、夫タンド伯爵が彼女の死の知らせに接するかを知ることができるだろう。

### III. 伯爵夫人の死 ―個人的な死―

『タンド伯爵夫人』の特色は、主人公の死の場面に与えられた重要性にある。この短い作品において、その全体に対する配分は大きい。<sup>34)</sup>ここでは、生き残る者―タンド伯爵―と死んでいく者―伯爵夫人―の対照に注目する。

#### 1) タンド伯爵 ―夫婦愛の欠如―

##### 人間の悲観的な真実

妻が不実の子を妊娠していることを知った伯爵は、復讐の欲望を抑えて何も世間には知られないようにすることを決心する。彼の考えでは、もし妻を殺し、妻が妊娠していたことが知られたら、真実は容易に分かってしまうだろう。しかし彼は妻の妊娠が世間に知られることは恐れない。それは、彼が、妻が他人の子を宿しているとは思われないと確信しているということになるが、その確信はどこから生まれたのであろうか。恐らく「伯爵はいつも、世間と従僕の日

には正しい行いを保っていた」からであろう。(CT 429) その後も、彼は殺せと言う妻に、「あなたがそう振舞うべきであったとおりの人であったかのように、振舞いなさい」と返事をするのだから。一見謎めいたこの命令は、要するに、世間に恥ずべき真実を知られないようにしろということである。彼にとっては、妻の殺害のみが真実を知らせる危険を伴う。それなら、手を汚さずにいた方が良い。そうすれば、妻が自分で始末を付けるだろう。妻から最後の頼みとして許しを請われ、おぞましい記憶でしかない自分ことを忘れてくれという手紙を受け取り、彼は「いくらかの哀れみさえを交えた歓喜」を覚える。それでも、作者は伯爵の態度が「全く人間味を欠いたものではない」ことをのべ、その罰せられるべき妻も、軽蔑されながらも、少しは憐憫に値することを示している。<sup>35)</sup> 歓喜という言葉は、夫の返事を受けとったタンド夫人の心境と一致する。大変強い情感であり、期待どおりのものを得たことを示す。つまり彼の復讐はとげられたのだ。この歓喜は、常時は他者に本当の感情も考えも隠して、礼儀どおりに振る舞うのみという洗練された宮廷人のあり方の真実をよく伝えている。そして作者はこの作品の中に、典型的な宮廷人で、アブノーマルではない、その憐れな妻の死に対する態度が読者を慄然とさせながらも、あまり無理なく納得させてしまうような人物を登場させた。なぜなら、本人さえもが普段は気づいていないような、人間の本質と最も隠された心の真実というものを描くには、普通の人の死に対する態度を描くのが最も適していると作者がみなしたからだと考えられる。

### 賢明さから再婚を拒否する

伯爵夫妻の結婚で始めた物語を、作者は以下のような一節で締めくくる。

「大変若かったにもかかわらず、伯爵は決して再婚をしなかった。そして長寿をまっとうした。」(CT 423) 17世紀には、寡夫(寡婦)の再婚は普通のことだった。そこで、伯爵の再婚の拒否は彼の最初の結婚における苦い経験が原因であろうと考えられる。彼はこの悲劇で何を学んだのであろうか。女性の節操のなさか、彼女たちによって不名誉を被る危険か。この同伴者の死後の再婚の拒否は、『クレーヴの奥方』でも、クレーヴ夫人がヌムール公との再婚を拒否するという形で登場する。ただ、クレーヴ夫人はその理由をヌムール

公に説明するが、タンド伯爵の真意については何も知らされることはない。それでも、以下のように考えられる。幸せな結婚はありえないと知ったタンド伯爵はもう妻をもつことは望まなかった。そして、長寿をまっとうできたのは再婚をしなかったからだ。つまり、結婚に原因する試練と不幸を経験して学んだ恋情と恥の危険をさけたからだ。この局面からみると、『タンド伯爵夫人』は、ある夫の死生観教育小説とも呼べるようである。

## 2) タンド伯爵夫人 一神の愛の不在一

### 偽りの回心

タンド夫人は夫の返事を読み、最後の絶望的な賭け一夫の手にかかって死ぬ一に失敗したことを知る。それでも、夫が自分の死に合意したと解釈し、「歓喜」“joie”を覚える。速やかにこの世を去れるのだ。この歓喜は伯爵が妻の最後の言葉を伝え聞いた時にも、表現された情感である。相反する立場にある二人一死んでいく者と生き残る者一にとって同じであるのは、その死が両方に激しく望まれたものであるからだ。彼女は自分の貞節という評判が失われることがないことを、そしていずれにしろ死ぬことができるのを夫の手紙によって確信し安心をする。これでやっと本当に死を迎える心の準備ができるのである。Micheline Cuéninはこの精神的準備を本当の「回心」“conversion”<sup>36)</sup>からなされたものではないと考える。なぜなら、主人公は、この世で犯した罪の償いをするのを嫌って天国に入ろうと望んだからである。それではどのように死を迎えるのか。「全ての感情が激しい人であったので、徳と悔悛に、恋を追い求めたのと同じくらい熱い思いではげんだ」タンド夫人は、その情熱的な性格からいっても、ナヴァル公に突然恋心を感じたように突然信心深くなる。彼女のこの変化については、Roger Duchêneも本来の意味における回心ではないとみなす。タンド夫人の魂は神の「恩寵」“grâce”を待つ状態ではない。いくら後悔をしても、それは自分の行為のおぞましい結果から逃げたいというだけで、その過ちを償おうという意図はない。<sup>37)</sup>この世に残っても待っているのは耐え難く辛い人生である。一方で死は彼岸の戸を開く。最も簡単な道を選ぶキリスト教徒にふさわしい「安易にすぎる解決方法」とRoger Duchêneが指摘するように、彼女が残る人生における試練を生きるために必要な本当の徳ともいえる魂

の力というものを生涯もつことはない。地上のあらゆるものに対する執着を失った主人公は、肉体と魂をともに破滅させていく。しかし、それはクレーヴの奥方の現世に対する達観とは異なる。クレーヴの奥方は自らの大病のあと、その世界観を変えた。それに対して、タンド夫人は、自分の死に立ち向かい熟考する魂の力を持たない。さらには、現実から目をそむけ、盲目的に死の思いにふけるが、神への愛では決してない。

### 尊厳なき孤独な死

悲嘆と生きる意欲の喪失は主人公から肉体的生命力を奪う。六ヶ月めの終わりに、激しい苦痛のせいで早産をする。「彼女は子供が死なずに生まれたのを見て、またその子が生き延びることもないのを確かめて、慰めを覚えた。」(CT 432) 子供が生き延びれば夫に実子でない相続者を与えることになる。とにかく夫以外には誰も真実を知ることにはないはずなので、安心して、彼女は子供の後をすぐに追うように息を引き取る。その時「死をかつて誰も感じたことのないような歓喜—“joie”—を持って迎えた。」ところで、既に作品中で二度しめされた歓喜よりも、このわが身の死を確信する満足を表す三つめの歓喜が最も強いと書かれている。Micheline Cuéninはこの死を前にした感情を、死に対する伝統的な恐れのない態度と同じものであるとみなす。<sup>38)</sup> 確かに当時のおびただしい数の若者の死—様々な理由による—を考慮すれば、伯爵夫妻を日常的なものである死に対して無関心にさせたかもしれない。しかし、二人には悲しまない個人的な理由があったのだ。そのために作者はこの死を詳細に語ったのである。伯爵夫人の不在の夫への遺言を再度考察しよう。この死は、家族の立会いもない告解師唯一人にみとられる孤独な死である。彼を仲介にして、夫人は告白の手紙でもしなかったこと、夫に許してくれと、そして「おぞましい」彼女の記憶を捨ててくれと「懇願」する。夫と家族の榮譽を汚しかけた自分の不貞の跡はわずかでも残したくはないのだ。これは本当の後悔から生まれたのか、それとも彼女にとりついた恥を恐れる気持ちからであろうか。いずれにせよ、この願いも夫の心を強く動かすことはない。許すという気持ちは書かれていないし、恐らく妻の願いにもかかわらず、生涯彼女のことは忘れないであろう。彼は再婚をする意志は全くないだから。では夫にも許してもらえないのな



ら、神にはどうなのか。答えは見つからないが、これはむしろ瀕死の、神に見捨てられた女性の劇的な死であると言えるだろう。そして、彼女の人生にも死においても尊厳と言えるものは何もないのだ。その人生と死は同時代の読者を哀れみから感動させることもなく、主人公の宿命の残酷さ、物語と登場人物の感情の極めて蓋然的な現実性は読者に震え上がるような恐怖を与えたはずである。<sup>39)</sup>

『タンド伯爵夫人』の最終部は主人公の人生の全ての帰結を描いている。タンド伯爵との政略結婚に始まり、ナヴァル公との不義の関係、不貞の発覚（夫のみ）、子供の死に先駆けるナヴァル公の死と主人公の妊娠、恥の恐怖—社会的な死—、自殺の欲望と死を迎える歓喜をもって終わる。彼女の不幸の数々は、彼女自身だけでなく周りの人々が真の徳をもたないことに原因があった。そして結果は主人公の尊厳なき孤独な死以外にはなりえなかった。アウグスチヌス学説が普及していた当時の読者には、タンド夫人が魂の救済を得ることは考えられなかったはずである。この死は神に見捨てられた者の“非業の死”である。ではどうしてこのような結果となったのか。それは、個人的には神と社会の掟—すなわち家父長制社会における結婚の精神性と世俗の制度—を無視しただけでなく、とりわけ彼女がこの世のことどもに対して、安らかな無関心さをもって己の死を迎えられるだけの人間としての器をもちあわせていなかったということに帰するであろう。伯爵夫人は必ずしも、社会的な存在としての死を意識しないままにいたわけではなく、その意識はやがて恥という激しい情念となっていったのであり、この意識と情念こそがただちに奈落へ落ちることを防いだのである。しかしながら、伯爵夫人は、決してこの世の無常や来世のことをクレヴ夫人と同じような心持で考えることはなかった。タンド夫人のそのような、社会的主体であることに基づく個人の“自己（我）”の意識が、ローマ法的そしてキリスト教的伝統に従って、当時の貴族社会を支えていたのである。しかしながら、その同じ意識が逆説的にも、精神的な徳なるものをみな墮落させるように、宮廷人を導いていった。人間の悲惨に虚飾をすてて相対することができたのであれば、偉大な魂の人と言われるようになったのであろうが、彼らはそれを求めようとはしなかった。だから、この作品の世界には—

切悲劇的なものも、形而上学的なものもない。

この不貞を犯した人妻の物語、また社会的、及び肉体的死を前にした彼女と夫の態度を描きながら、ラファイエット夫人は、人間の弱さのゆえにほとんど必然的となる、世俗の制度と宗教信仰の間に生まれる歪みを明らかにしたのである。

\*\*\*\*\*

この作品が、当時の風潮に従って、読者の気晴らしと同時に教育的な意義をもったものとして書かれたのであっても、ラファイエット夫人は其中で結婚と結婚生活の現実と不平等を当時の男女両性に幻想抜きで描いた。この社会的状況の把握は、テキストにおける登場人物の心理を理解するのに不可欠である。作者のこれ以降の作品群において発展される様々な主題—結婚生活、宿命的な情念、人間の弱さ、社会的な死と救いとしての死、回心と救済—もこの歴史的背景に基づいている。

『タンド伯爵夫人』における死は目に見えては最終部にしか現れない。しかしながら物語の始まりにおいて既に、主人公のパスカルの意味での気晴らしの行為—この作品では婚外の愛—の陰に死が現れているのである。この潜在的な死は断続的にタンド夫人を脅かし、彼女が妊娠したと気づくときにはより現実性を帯びて、最後には、彼女の裏切りに復讐を望む夫の手にかかって死にたいと思うまでに主人公を追いやる。

自己愛のために人々が最も恐れる恥、この社会的な死は、真実の徳をもつ者たちが不名誉とみなすものと同一ではありえない。その徳をもっていれば、不義を犯した妻でも人間の尊厳を保つことができたはずである。反対に、自殺とか肉体の死というのは、つらい人生を免れようとする罪を犯した女性には、救いをもたらす死という様相を示す。この作品においては、死はそれ自体について考察されることはない。<sup>40)</sup>それは生の終わりではない。ただ一人の登場人物、すなわちその復讐の欲望にもかかわらず冷静さをなくさなかった夫は、主人公とは反対に他者の死をとおして人間の条件の虚飾を学ぶが、真の徳のある人となったかは分からない。一方で妻は、全てに強すぎる情念をもったために、尊厳なき孤独な死を迎えるばかりである。この作品では、作者は不幸な主人公

にわずかな反省能力をも与えずに、ただ死んでいくまを描く。クレージュの奥方に比べて、伯爵夫人は知性においても魂の力においても弱すぎる。この精神的な成熟の欠如はラファイエット夫人の最後の小説に対してこの作品がその前に書かれたことを暗に示唆している。さらに、豊かな表現力を秘めてはいるが、死をほのめかす表現の短さと簡素さは、この作品が草稿であるという推測によって説明がつく。

これらの描写の全てが語るように、ラファイエット夫人のペシミストな世界観は原初的な姿で浮かび上がる。すなわち、人間の本性の残酷さ、偉大な魂の不在、悲劇性そしてさらに魂の救済の可能性の欠如である。自分の運命と人間の条件についての深い考察によって「類のない徳の手本」を残して主人公がこの世を去る『クレージュの奥方』に比べると、伯爵夫人が惨めではあるが人間みのある死を迎える『タンド伯爵夫人』は作者の最後の小説のネガティブのように受け止められている。従って『タンド伯爵夫人』は、彼女の文学上の経験の始まりにおける、死を前にした人間の姿を語る物語の原型であり、それは『クレージュの奥方』において完成すると考えられるのである。

最後にもう一度、もっと一般的な視点から振り返ると、『タンド伯爵夫人』においては、ラファイエット夫人が人間の弱さのためだけでなく、女性の立場を不利にしていた社会のシステムのせいによっても生じていた社会制度と宗教信仰の間にある歪みを描き出しているということである。この、主人公をその不義の罪で非難しているかのような作品の結末は、社会にたいする批判的な視線を示唆しているのではないだろうか。そして、このような状況で人間が個人の尊厳を保つのは、魂の強さ、全ての規範から解き放たれた個人の徳によってしかできないことを、作者は予感していたのかも知れない。続く『モンパンシエ公爵夫人』は大筋ではストーリーが『タンド伯爵夫人』に大変良く似た作品ではあるが、この問題についての作者の姿勢をさらに理解するのに前者を読み解くことが役立つであろう。

#### — 註 —

- 1) 本稿は執筆者のスタンダール・グルノーブル第三大学に1999年6月提出受理された博士論文の一部を修正し和訳簡略化して紹介するものである。使用したテキストは、*Mme de*

*Lafayette, Romans et nouvelles*, édition de Alain Niderst, Paris, Classique Garnier, Bordas, 1990. 本論文中のテキスト引用の該当ページは (CT 425) のように示される。Masayo NOMURA, *La mort dans l'oeuvre de Madame de Lafayette*, thèse de nouveau doctorat, Université Stendhal-Grenoble 3, soutenue en juin 1999, 471p.

『タンド伯爵夫人』梗概：カトリーヌ・ド・メジシスの近親でありイタリアの血をひくクラリッサ・ストロッチは、サヴォワ家のタンド伯爵と、大変若くして結婚する。夫人は夫に激しく恋をしていたが、夫は彼女に愛情をもたず、他の女性を愛するようになる。すると、夫人の嫉妬があまりにひどいので、夫は妻をさけて暮らすようになってしまった。やがて、夫人は宮廷でヌシャテル公爵夫人と友情を結ぶ。この夫人はすでに寡婦であり大変裕福であった。美しく品格もあり家柄はいいが、財産も権力もない独身のシュヴァリエ・ド・ナヴァールはそこに目を付けて、この寡婦を誘惑し、彼女との結婚を企む。その秘密の計画を打ち明けられたタンド伯爵は自分の妻を相談相手としてナヴァール公に紹介し、夫人と騎士は密かに激しい恋仲となる。タンド夫人は、ヌシャテル夫人への友情と騎士への恋、この二人の将来を考えて、ジレンマに陥る。自分の恋を諦めれば、恋人と親友の幸福は約束されると自分を納得させようとするが、今度は騎士が、自分の将来を投げ捨てて、彼女への愛を貫くと言い出す。それでも夫人は騎士をヌシャテル夫人と結婚をさせるが、自分の恋にあらがえず逆に騎士と不倫の関係になってしまう。親友と夫を裏切ったのだ。更に、妊娠したことを知る。騎士の子である。その事実が発覚すれば妻としての良い評判は、不貞の恥にとって変わられ、夫の信頼とともに全てを失うことになる。夫も名誉を傷付けられたことを許すはずはない。途方にくれている時に、騎士が戦場で戦死をしたことを知る。帰宅した夫がナヴァール夫人の悲嘆を語ると、妻は悲しみの涙にくれる。そこで夫は真実に目覚める。妻は夫に告白の手紙を書き、彼女の命を絶つようと強く促す。夫はその望みを無視し妻を自分で自分の結末をつけるように追い込む。苦しみの末、夫人は生きる続ける望みのない子を早産する。夫人は世間には真実を知られず、不義の子を夫に残さずにすんだことには満足しながら、夫に対しては許しを請い全てを忘れて欲しいという言葉を告解師に託して息をひきとる。夫はいくらかの哀れみは覚えたものの喜びをより強く感じる。彼はその後再婚することもなく、長寿をまっとうする。

- 2) 実際には、登場人物とそのエピソードに照らし合わせると、Marie de Longueville と Mme de Roquelaure の人生に近く、それがモデルになっているようだと考える Alain Niderst によると、この作品は 1658 年から 1660 年の間に執筆されたと推定される。Voir Introduction de l'édition d'Alain Niderst, *op. cit.*, p. XLVI-XLVII et note 2.
- 3) Paul Bénichou, *Morales du Grand Siècle* (1948), Collection Folio/Essais 99, Gallimard, 1994, p. 128-148.
- 4) Henri Coulet, *Roman jusqu'à la Révolution*, Paris, A. Colin, 1967, p.211.
- 5) *Petit dictionnaire de Théologie Catholique*, Paris, Seuil, 1970, p.269.
- 6) "l'homme ne peut pécher que contre le lien du mariage d'un autre, la femme seulement contre le lien de son mariage à elle", *Ibid.*, p. 268.
- 7) François Lebrun, *La vie conjugale sous l'ancien régime*, Paris, Colin 1975, p.21. このような状況を示唆する一節が『タンド伯爵夫人』中にもある。「同時にタンド伯爵は夫人に対してあなたも彼女が彼の妻ではないような恋情を覚えるようになった」。Lucien Febvre も当時の結婚の定義を以下のように述べている。“cette union est publique, et sociale. Elle achève d'intégrer le jeune home, elle intègre d'un seul coup la jeune femme à la société. Ceci fait, reste l'amour.” Lucien Febvre, *Amour sacré, amour profane*, Folio/Histoire 74, Paris, Gallimard, 1996, p. 338.
- 8) “ce qui seul peut faire le bonheur d'une femme, [...] est d'aimer son mari et d'en être aimée.” 本

- 論に使用したテキストと同じ édition 中 *Princesse de Clèves* p.260.
- 9) Micheline Cuénin, “La terreur sans la pitié”, in *Revue d’Histoire Littéraire de la France*, mai-août, n°3-4, 1977, p. 492.
  - 10) “songez-vous à ma réputation?” (CT 422)
  - 11) Cité par M. Cuénin dans “La terreur sans la pitié”, *op.cit.*, p.491.
  - 12) “enfin, il crut voir la vérité, mais, il lui restait néanmoins ce doute que l’amour-propore nous laisse toujours pour les choses qui coûtent trop cher à croire.” (CT429)
  - 13) “S’il eut eu des témoins, le violent état ou il était l’aurait fait croire privé de raison ou prêt de perdre la vie”. (CT 431)
  - 14) Comme il était l’homme du monde le plus glorieux, il prit le parti que convenait le mieux et résolut de ne rien laisser voir au public”. (CT 432)
  - 15) “Le désir d’empêcher l’éclat de ma honte l’emporte présentement sur ma vengeance. (CT 432)
  - 16) “Le ridicule déshonore plus que le déshonneur.” La Rochefoucauld, les Maximes 326, texte établi, présenté et annoté par André-Alain Morello, in *Moralistes du XVIIe siècle*, édition établie sous la direction de Jean Lafond, Collection Bouquins, Paris, Laffont 1992, p 164.
  - 17) “leur mariage, qu’elle avait souhaité, lui fit horreur”. (CT 421)
  - 18) “La comtesse de Tende était prête à expirer de douleur” (CT 421)
  - 19) この「外国出身（イタリア）」の女性が異国で夫を愛を得られずに、孤独に苦しむあまり婚外に愛人を持ち激しく執着するというエピソードは、『クレーヴの奥方』におけるカトリヌ・ド・メディシスのシャルトル公にたいする恋情に類をみることになる。
  - 20) “Leur passion ne se ralentit pas par le périls et par les obstacles.” (CT 424)
  - 21) “la comtesse de Tende n’avait point de repos et le sommeil ne venait plus adoucir ses chagrins.” (CT 424)
  - 22) “elle n’eut pas la force de s’en dégager.” (CT 427)
  - 23) Henri Coulet, *Roman... op., cit.*, p.247.
  - 24) “Mme de Tende avait trouvé dans les commencements le prince de Navarre si plein de respect, et elle s’était senti tant de vertu, qu’elle ne s’était défiée ni de lui, ni d’elle-même. Mais le temps et les occasions avaient triomphé de sa vertu et du respect.” (CT 428)
  - 25) “Elle ne craignait plus rien pour son repos, pour sa réputation, ni pour sa vie.” (CT 428-429)
  - 26) “La mort seule lui paraissait désirable, elle l’espérait de sa douleur ou était résolue de se la donner.” (CT 429)
  - 27) Voir *L’histoire du suicide*, Georges Minois, Paris, Fayard, 1995, p.11. “La mort volontaire signifiait jadis une effraction divine et sociale comme l’adultère des femmes.” “Le suicide est à la fois considéré comme une insulte à Dieu qui nous a donné la vie, et à la société qui pourvoit au bien-être de ses membres. Refuser le don de Dieu et refuser la compagnie de nos semblables au banquet de la vie sont deux fautes que les responsables religieux, qui gèrent les bienfaits divins, e les responsables politiques, qui organisent le banquet social, ne peuvent tolérer”.
  - 28) “n’ayant plus que de l’horreur pour sa vie, elle se résolute de la perdre d’une manière qui ne lui ôtat pas l’espérance de l’autre.” (CT 430)
  - 29) アウグスティヌスの意味における “fausse vertu” とは、神の愛によってではなく、自己愛によって行動するものである。Voir, Jean Lafond, *La Rochefoucauld: Augustinisme et littérature*, Paris, Klincksieck, 1986.
  - 30) “on devine un rapport entre l’une et l’autre, un recours possible contre la passion qui dévore à la passion qui retient”. この指摘の後に、Coulet はこの作品が『クレーヴの奥方』の前に書かれたものであることを示唆する。“Ce rapport, hâtivement présenté ici comme un antagonisme et

- une exclusion réciproque, sera approfondi dans *La Princesse de Clèves* avec une pénétration si géniale qu'il serait incroyable que *La Comtesse de Tende* n'en eut rien retenu si elle était venue après." Henri Coulet, *Roman... op., cit., p.247.*
- 31) "C'est la conscience affreuse d'une sorte de mort civile qui suit la perte de la réputation et qui précipite dans la tentation du suicide la malheureuse comtesse de Tende." Micheline Cuénin, *Madame de Lafayette, Histoire de la Princesse de Montpensier, Histoire de la Comtesse de Tende*, Genève, Droz, 1979, p.25.
- 32) 当時のモラルにおける "honnêteté" については、筆者の上記博士論文 p.43 の note 51 を参照。
- 33) しかし、この二つの情念は、Henri Coulet が言うほどには、排除しあうものではない。
- 34) Alain Niderst 編のテキスト全 14 ページ中 1 ページを占める。
- 35) "sans inhumanité et même avec quelque sentiment de pitié, mais néanmoins avec joie". (CT 432-433)
- 36) "il semble que nous assistons à l'augmentation de l'intériorisation de la vie religieuse, la conversion devient [...] un renouvellement psychologique qui se manifeste par une rupture avec le passé et elle devient également une pénitence: c'est l'affirmation de la toute puissance de la gloire divine." Marie-Christine Varachaud, *La conversion au XVIIe siècle*, microédition de 87 pages à partir du texte dactylographié du mémoire de maîtrise d'histoire, Université Paris IV, Centre de recherche sur la civilisation de l'Europe moderne, 1972, p.1-2.
- 37) "Même le repentir et la pénitence ne sont rien s'ils ne viennent d'un retour sur soi, non de la grâce de Dieu donnée à un pécheur qui se confie en lui". Roger Duchêne, *Madame de Lafayette*, Paris, Fayard, 1988, p.460-461.
- 38) "Ces attitudes individuelles sans doute, mais collectives par leur convergence montrent assez que la mort n'est nullement respectée pour elle-même: elle m' émeut guère, parce qu'elle est familière, apprivoisée comme dit Philippe Ariés, mais aussi inférieure en poids mental à des réalités aussi puissantes que la réputation, l'honneur ou plus généralement, des classes riches aux classes pauvres, l'habitude et la résignation". Micheline Cuénin, "La mort dans l'oeuvre de Madame de La Fayette" in *Papers on French Seventeenth Century Literature*, Actes de Tronto, t. X-2, 1978-1979, p.111.
- 39) この小説に認められる新しさのひとつは、Micheline Cuénin の指摘するとおり、恐怖—"terreur"—を効果的に利用したことにある。少し前のバロック時代に属する Jean-Pierre Camus の作品に特徴的な異常にリアルで残酷な描写は一切なくても、できごとと当事者の心理の描写のみによる手法は、現実の状況を良く知る読者たちにはそれだけで十分に説得力があった。想像力は刺激され、主人公の恐怖は具体的描写を必要としない。
- 40) 語られた死のなかでナヴァル公、従者ラランドそして子供の死は全く主人公の死とは異なる。この三つの死の共通する特徴は、知らせの簡潔さである。"La Lande [...] était mort en peu de jours", "le prince de Navarre avait été tué le dernier jour" (CT 428), "il (l'enfant) ne pouvait vivre" (CT432) 知らせの短さと同様に、彼らの死は突然に訪れ、あつと言う間のできごとで、人間の生の虚しさを表しているかのようだ。このようなタイプの死の記述は『タンド伯爵夫人』以降のラファイエット夫人の作品に次第に多く登場するようになる。そして、より多くの暗黙の様々な表徴を含んでいる。この突然で乱暴な死はその前では人間が全く無力である宿命を象徴化している。この点については別の機会に論じる。上出の筆者博士論文を参照。